

心理学的状況の分類に関する探索的研究¹⁾

外山 みどり

§ 問題

1. 心理学における「人」と「状況」

心理学においては、人間の行動の決定因として、各種の刺激や周囲の環境条件などの個体外の要因と、個体内の心理的・身体的要因の両者が考慮されてきた。これを端的に表現したものが、有名な Lewin (1951) の公式、 $B = f(P, E)$ である。Lewin は、生活空間に関する場理論的な考察の中で、行動を生じる条件として、人と環境²⁾の力の両者が作用することを指摘した。

この2種類の決定因のうち、知覚や学習の研究を中心とする伝統的な実験心理学では、主に物理的刺激の強さや提示方法、強化のスケジュールのような個体外の変数を操作して、それらが人間の心理過程や行動に及ぼす効果を検討している。そして社会心理学においても、社会的環境、社会的刺激、他者や集団からの影響力が個人に及ぼす効果に関する研究が多く行われ、個体外変数が検討されている。

同一の環境の中で同一の刺激を与えられても、個々人の行動は同一に

ならない。これを説明するものとして、個人内の要因が及ぼす影響を考えることが必要になる。個人差や個人の特性に関する問題は、主に性格心理学や知能研究の領域で検討されてきた。知能に関しては、構成要素としていくつの因子を想定すべきかの議論をはじめとして、結晶性知能と流動性知能の区別、認知的側面での個人差など、さまざまな論議がなされたほか、各種の検査が開発された。性格心理学においても、古来、性格の分類と記述に関する諸説が提出されており、人の性格をいくつかの典型的なタイプに分類する類型論や、性格の基本的な次元や特性を抽出した上で、それぞれの特性上での各個人の位置を測定するという方法をとる特性論的アプローチなどが展開されてきた。最近では、ビッグ・ファイブと呼ばれる5因子によって、人間の性格を記述しようとする試みが注目を集めている（John & Strivastava, 1999 参照）。

これに対して、人間を取り巻く物理的環境や社会的状況に関しては、前述のように、実験心理学や社会心理学でさまざまに検討されてきたものの、それはたとえば知覚や学習を規定する要因のように、特定の文脈における特定の行動に関連する環境・状況要因であり、人間に影響を与える環境全体の分類や状況の性質に関する体系的な研究は乏しい。その点で心理学的状況に関する研究は、性格、知能、態度などの個人変数の研究に比べて、立ち遅れていると言わざるを得ない。また、人間の性格を表現する語彙は非常に豊かであるのに対して、状況の性格を記述するための語彙のリストも現状では整備されていない。このような現状では、まず状況の心理学的意味に関して、予備的・探索的な検討を行うことが必要であろう。

2. 性格心理学における「人」-「状況」論争

「人」と「状況」の問題に注目が集まるようになった発端は、Mischel (1968) が提起した、従来の性格概念に対する根本的な疑問であった。性格心理学においては、さまざまな状況を通じて同一人物の行動は一貫しているという前提に基づき、その背後に「性格特性」の存在を仮定し

てきた。たとえば、親切な人は、知人に対しても初対面の人に対しても親切に振舞うことが多く、几帳面な人は、仕事の場面だけでなく、休日の旅行でも綿密な計画を立て記録を残す。そのため、ある人の性格特性を知ることは、諸場面での行動を予測するために有益であると考えられてきた。

このような特性論的仮定に対する Mischel の批判は、まず行動の状況間一貫性が概して低いという実証的研究結果の指摘から始まり、それによって安定した「性格特性」の存在に疑問を投げかけた一方、状況が行動に及ぼす影響の指摘、各状況を通じた行動の変動性における個人差の検出、より認知的な個人変数の提唱、状況と個人の相互作用の検討という形で進展をとげた。

Mischel の指摘は性格心理学全体に大きな波乱を呼び、行動の状況間一貫性に関して、そして行動の原因と考えられる安定した性格特性の存在に関して、活発な論争が展開された（若林, 1993、Krahe, 1992 など）。行動の状況間一貫性に関してみるならば、実証的研究の結果では、同一の種類の行動に対する、時間を越えた安定性はかなり高いが、同じ特性を表すと思われる異なった行動の間には、せいぜい .2～.3程度の相関しか見出されないことが多い。この程度の一貫性では、異なった状況での行動を予測することは事実上困難である。

Mischel は状況内の諸力が行動に及ぼす影響を重視したが、各状況が行動を規定する程度には大きなばらつきがある。社会的、物理的な拘束力が強い状況では、ほとんどの人が同じ行動をとり、個人差の入り込む余地は少ないが、自由な状況では個人差が大きく、個々人の内的傾向性が行動に反映されやすい。これを Mischel は、強い状況 - 弱い状況と呼び、状況によって個人内要因の作用が異なることを明らかにした。

後に Mischel & Shoda (1995) は、行動の一貫性を生じる内的な原因としての性格に代わるものとして、認知感情のシステムとしての性格を考え、符号化、期待と信念、感情、目標と価値、潜在的能力と自己制

御的プランという5つの要素からなるCAPS（Cognitive-Affective Personality System）を提唱している。ここで問題にされている個人差は、さまざまな特徴をもつ個々の状況を、個人がどのように認知するかという側面と関連しており、状況間一貫性よりもむしろ状況間の変動を予測するものである。つまり、行動が諸状況間でどのように変動するかのパターンこそが個人を特徴づけるものであり、状況ごとの行動変動のプロフィール（behavior signature）が性格を記述する。ここでは、いかなる場合にいかに行動するかという条件付きの（if-then）情報が重要になるのである。

このようにMischelのモデルによってはじめて、性格心理学研究の中で、状況の心理的な意味に注意を向ける必要性が認識されるようになり、行動を生じるに際しての、個人要因と状況要因との相互作用が重視されるようになったといえることができる。

3．帰属の推論における「人」と「状況」

現実場面の行動に関して、人と状況の諸要因がそれぞれどの程度の影響力をもつか、そして、人と状況がどのように相互作用するかを明らかにすることは、心理学全体の課題であるが、他方、一般の人が人間の行動をどのように認知し、推論するかという社会的認知、帰属過程の問題の中にも、人と環境・状況が重要な要素として登場してくる。

人間の行動に対する認知の問題に、「人」と「環境・状況」を2つの基本的な要素として導入したのはHeider（1958）である。Heiderは、専門家ではない普通の人々が、自分を取り巻く世界をどのように認知し、人間の行動をどのように解釈するかを重視する“素朴心理学（naïve psychology）”を提唱したが、因果関係の認知、行動の原因に関する推論は、その中核を成している。Heiderによれば、まず、行動は個人内の力と環境の力とによって生じ、両者は加算的な関係にあると想定される。つまり、一方が弱くても他方がそれを補うほどに強ければ、行動は生じる。個人内の要因は、さらに能力と努力とに分けられ、この2つは乗算

的關係にある。つまり、どちらかがゼロであれば個人要因はゼロになる。個人の能力が環境内の障害等の力を超えたときに、“can”という状態が生じる。Heider は、“can”（できる）と“trying”（しようとする）という2つの条件を満たしたとき、人間の行動が生じると考えた。

このように行動の発生状況を認知側から考えてみると、行動の原因が人にあるのか、人以外にあるのかという区別が重要になる。これを Heider は“personal causality”と“impersonal causality”と呼んだ。現実に入が行った行動であっても、その原因は人の内部にあるとは限らず、環境内の諸力によって引き起こされたり、偶然に左右されたりすることもある。このような場合には、“impersonal causality”と認定される。これは後に、行為者内部の原因によって結果が生じたとする内的帰属と、それ以外の外的な原因が結果を引き起こしたとする外的帰属の区別として、帰属研究における基本的な次元となった。

現実に帰属の判断を行う場合には、個人内部の原因と外部の環境・状況要因のそれぞれの関与の程度を、直接に知ることは困難であるので、何らかの手がかりから推定することになる。その際、ある種の原因間には相補的な関係が存在すると想定できるので、それを利用した推論が行われる。これを命題の形で表現したものが、割引原理である（Kelley, 1972a）。割引原理とは、ある原因（A）の因果的役割を推定する際、他にも原因と考えられる要因（B）が存在する場合には、当該の原因（A）の寄与の程度が割り引かれるというもので、促進的な外的条件（例・社会的な圧力・報酬）が存在する場合に、本人の意図や内発的動機が割り引かれるというような事例に適用される。割引原理が適用されるようなケースでは、2つの原因AとBは、どちらか一方が存在すれば、他方の存否にかかわらず結果が生じるという関係にあることが前提とされており、これを Kelley（1972b）は、複数十分原因という因果スキーマとして表現しているが、2つの要因は必ずしも、内的要因と外的要因の組み合わせであるとは限らない。たとえば、努力の程度を手がかりに能力を

推定する場合のように、内的要因同士の間にも適用されることもある。しかし他者の行動に関する帰属判断を行う場合、本人の興味や感情、態度などのような内的な状態を直接知ることは一般に困難であるのに対して、環境・状況の物理的、社会的な要因の作用は比較的わかりやすいため、外的状況に関する情報を手がかりにして、本人の内面を推定するという方向の推論が起りやすいのである。

割引型の推論が起るとするならば、強い外的圧力によって強制された行動や単なる役割を演じただけの行動からは、行為者の内的特性や内的状態を推論することはできないはずである。しかし態度帰属の研究は、この予測に反する注目すべき傾向を見出した（Jones, 1979）。人は、選挙の応援演説をしたり、結婚式でスピーチをしたりするような場合、本心とは少し異なる言明を行うことがある。極端なケースでは、ディベートのように、賛成・反対どちらの側から演説をするかをくじ引きで決める場合さえある。ところが多くの研究結果が示すところでは、人は他者の言明を見聞きしたとき、それが周囲から強要されたり、くじ引きで割り当てられたりしたものであることを十分認識している場合でさえ、その人が述べた内容と対応する態度をもっていると推論してしまう傾向をもつ。これは多くの実証的研究を通じて見られる、非常に強固な傾向であり、「対応バイアス」と呼ばれている（Gilbert & Malone, 1995）。このバイアスの背後には、他者の行動を解釈する際に状況要因の作用を考慮に入れない傾向、また原因の推論に際して、外的状況よりも個人要因を重視する傾向が潜んでいる。原因帰属において外的要因よりも内的要因を過度に重視する傾向は、「基本的な帰属のエラー」と呼ばれているが（Ross, 1977）、対応バイアスは、このような推論の非対称性が特性推論の局面に現れたものと見ることができる。

対応バイアスは、状況の影響力を十分に考慮に入れずに判断を行う傾向であるが、これはどのような種類の状況にも当てはまるのであろうか。行動に影響を与える外的要因には、物理的な制約、社会的規範や集団の

圧力、重要な他者の影響などさまざまな種類がある。多くの態度帰属研究で用いられてきたのは、偶然による割り当てや教師の指示のような外的規制であるが、たとえば上司に気に入られようとして同意したと疑われるような場合には、対応バイアスが見られないという研究結果もある（Fein, 1996 など）。いかなる状況要因は無視されやすく、判断における対応バイアスを生じやすいのか、逆にいかなる場面では、状況要因を考慮に入れた推論がなされるのかを知ることは、帰属に関する推論の研究に大きく資することになると考えられる。それと同時に、このような観点から、環境・状況に関する分類と特徴の記述が可能であれば、心理学的状況に関する研究を推進する糸口となることも期待できる。

4．状況の記述・分類に関する先行研究と本研究の概要

1．で状況に関する体系的研究が少ないことを指摘したが、もちろんいくつかの注目すべき研究は存在する。これらの多くは、Mischel（1968）の主張に触発された相互作用論との関連で行われている。

Magnusson（1971）は、大学生が日常的に経験する36種の状況に関して類似度評定を求め、そこから因子分析によって5因子を抽出した。またForgas（1976）は、大学生と主婦のサンプルを用い、対人場面を表す25の社会的エピソードの類似度を評定させて、それをもとに多次元尺度構成法とクラスター分析を実施している。その結果、多次元尺度法では、知覚された親密さと、どのように行動すべきかに関する主観的な確信度とが、重要な次元であることが明らかになっている。

Krahé（1990）は、状況の客観的な性質よりも、心理的・主観的な性質に注目すべきであると主張しているが、状況認知の研究によると、「快-不快」、「偶発的-意図的」、「社会的-非社会的」という3つの次元が、多くの状況を通じて共通に抽出されている。またForgas & VanHeck（1992）は、認知された状況ではなく、現実の状況そのものを言語分析によって分類しようと試み、因子分析によって、「対人的葛藤」、「共同作業・意見の交換」、「レクリエーション」などの10のカテゴリを見出し

た。堀毛（2003）は、この分類を手がかりにして、諸状況での行動頻度と特性推論の関連を検討している。

本研究では、このような背景に基づいて、状況の性質を記述する手がかりとなる基本的次元を抽出し、状況の分類を試みることによって、諸状況の心理学的な意味を探求するために、2つの質問紙調査を行う。調査1では、帰属研究との関連から、状況の拘束性に焦点を絞り、クラスター分析によって状況の分類を試みる。続いて調査2では、情動的な側面を含めて各状況がもつ心理的意味をより広く探求するため、SD尺度による評定を求め、それに基づいて多次元尺度構成法を実施する。Forgas（1976）の方法を参考にすが、本研究では類似度判断ではなく、あらかじめ設定した尺度上での評定をもとにした分析を試みる。

§ 調査1

【方法】

予備調査と刺激場面の抽出　まず、大学生が日常的に経験するような社会的場面の事例を収集するために、自由記述による予備調査を行った（学習院大学学生24名）。この予備調査の結果、および社会的規範の強さに関する文化比較研究で使われた状況例を参考にして、以下の12の場面を選定した。

- a. 「家で家族と食事をしている」場面
- b. 「大学で授業を聞いている」場面
- c. 「街中の雑踏の中を歩いている」場面
- d. 「病院で診察を待っている」場面
- e. 「就職面接」の場面
- f. 「葬儀に参列している」場面
- g. 「サークルで皆と相談している」場面

- h. 「アルバイト先で上司の指示を受けている」場面
- i. 「友人と喫茶店で話をしている」場面
- j. 「自分の部屋で音楽を聴いている」場面
- k. 「図書館で本を読んでいる」場面
- l. 「スーパーやコンビニで買物をしている」場面

参加者 学習院大学学生75名（男子21名、女子54名）。授業終了後に質問紙を配布し、回答を求めた。

状況評定尺度 調査1では、状況が行動に及ぼす拘束力の強さに注目し、以下の5つの側面から評定を求めた。

1. その場面で、個人はどの程度自由に振舞うことができるか？
2. その場面では、どの程度個人の性格が行動に表れやすいか？
3. その場面では、どのように行動すべきかの規範がどの程度作用するか？
4. その場面では、各人の行動に、どの程度個人差が見られるか？
5. その場面は、どの程度リラックスした、あるいは緊張した場面か？

各評定は、1～7の7段階尺度によって行われた。これらのうち、3. は社会的規範という形の拘束力の評定であり、5. は、より心理的な緊張感という側面からの行動の制約を測定することを目指した。状況的拘束力が弱ければ、個人の性格が行動に表れやすく、行動における個人差が大きいと予測される。2. と4. の質問は、これを意図したものである。

【結果と考察】

1. 各場面に対する評定

各場面に対する5種類の評定平均値を表1に示す。12場面の中では、「家族で食事」、「自室で音楽」、「友人と会話」の場面で、自由度が高く、行動に性格が表れやすいと評定されている。それに対して、「葬儀」や「就職面接の場面」では、規範の作用や緊張度の評定が高くなっている。

表 1 . 各状況に対する評定平均値

	自由度	性格	規範	個人差	緊張度
家族	5.81	5.91	3.25	5.28	1.95
友人	5.93	6.24	2.69	4.63	1.89
自室	6.77	5.80	1.47	4.57	1.12
サークル	4.65	5.67	3.67	5.69	3.28
コンビニ	5.23	4.79	3.75	4.55	2.80
雑踏	4.24	4.15	3.96	4.35	3.64
図書館	4.35	3.67	4.83	2.69	2.93
授業	3.41	4.28	5.11	4.83	4.28
病院	4.69	2.95	5.64	3.05	5.11
上司	2.61	3.69	5.43	3.72	5.24
面接	1.81	3.55	6.55	3.83	6.75
葬儀	1.60	2.35	6.56	2.33	5.91

2 . 各評定間の相関

当初より、5種類の評定の間には相関があることが予想された。つまり、状況の拘束力を表す「規範」や「緊張度」が高ければ、自由度は低く、行動における個人差は少なく、そして性格が行動に表れにくいと認知されると予想される。

全場面を総合して、各評定間の相関を計算すると、すべての組み合わせで有意な相関が得られた（ $r = .488 \sim .829$ ）。その中で、最も強い相関が見られたのは、行動の自由度と場面の緊張度との間の負の相関（ $r = -.829$ ）であった。緊張度の高い場面ほど、行動の自由度が低いと評定される傾向を示しており、場面ごとに見ても、この2測度の相関は一貫して高い。規範の強さと場面の緊張度とは、やや異なった性格の状況的影響を意味するものと想定したが、両者の間の相関は、「雑踏」を除く11場面で有意であり、2側面の違いは十分に区別されていないように思われる。全体的に見て、自由度と緊張度・規範の強さの間の負の関連は極めて明瞭であるが、それに対して、状況の自由度が高いほど行動の個人差が大きく、性格が行動に反映しやすいという関係については、場面によっては有意にならない場合もあり、それほど明確ではない。

3 . クラスタ分析

5種類の評定結果をもとにして、Ward法によるクラスタ分析を行

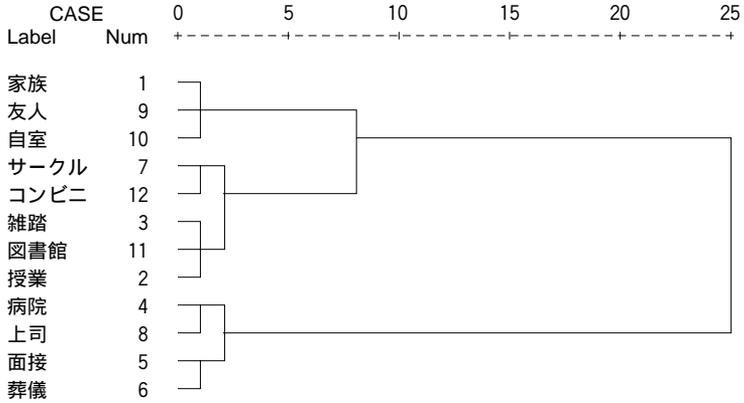


図1. クラスタ分析の結果

った。デンドログラムを図1に示す。

これを見ると、12場面は大きく3つのクラスターに分かれている。まず第1クラスターには「家族で食事」、「友人と会話」、「自室で音楽」の3場面が含まれる。行動の自由度が高く、私的でリラックスした状況であり、状況の拘束度の最も低い状況群である。中程度の拘束度をもつと考えられる第2クラスターには5場面が含まれるが、それはさらに、比較的自由に規範性の低い「サークル」および「コンビニ」場面と、よりフォーマルで行動規範の存在が認められる「授業」、「図書館」の2群に分けることができる。周囲からの影響力が弱いと思われる「街中の雑踏」が、後者に含まれていることはやや予想外であるが、多数の人の中での匿名的状况という性格づけも可能かもしれない。第3クラスターには状況の拘束性の高い4場面が含まれる。このクラスターに含まれる場面は、他のクラスターほど日常的でない状況といえるが、極めて緊張度、規範性が強く、行動の自由や個人差の発現が抑制される「葬儀」および「就職面接」と、やや経験頻度が高く、緊張度がさほど強くない「病院」、「上司」の場面に分けることができる。

以上のように、状況の拘束力が強いほど、性格が行動に表れにくく、個人差が少ないと予想されるという、外的拘束力の強さと内的特性の発現に関する負の関係は参加者に認識されていることがわかった。対応バイアスのような推論傾向は、このような一般的な関係の知識が、帰属の推論の際に十分利用されないことを示すが、なぜそのような傾向が生じるかに関しては、今後さらに検討する必要がある。

クラスター分析の結果は、事前の予想をほぼ確認するものであったが、強い社会的規範が存在する状況と、心理的な緊張や不安を生じる状況とは明確に弁別されていないように見える。これに関しても、状況の種類や数を増やし、測度の範囲を広げて、異なった種類の影響力をつきとめる試みを行わなければならない。

§ 調査 2

調査 1 では、状況の拘束性、行動の自由度を中心にして、状況の分類を試みたが、調査 2 では、快 - 不快などの情動的な次元を含めてより広い心理的意味を探るために、SD 尺度による評定を求め、それに基づいて多次元尺度構成法を試みる。

【方法】

参加者 学習院大学学部学生・大学院生34名（男子9名、女子24名、不明1名）。授業終了後に回答を依頼した。

刺激状況および評定尺度

刺激状況としては、調査 1 と同じ12場面を用いた。使用した SD 尺度は、従来の研究で多く使用された形容詞対を参考に、状況評定に適切と思われるものを18対選定（表 2 参照）した。参加者は各状況を、その18個の形容詞対に関して7段階で評定した。

表 2 . 用いられた尺度と因子分析の結果

				共通性
生き生きした-生氣のない	.986	-.178	-.122	.749
陽気な-陰気な	.893	.002	-.168	.819
明るい-暗い	.873	.042	-.178	.839
活発な-不活発な	.848	-.175	-.305	.617
面白い-つまらない	.715	.111	.189	.698
楽しい-苦しい	.701	.232	.143	.837
幸福な-不幸な	.682	.206	.165	.771
友好的-敵対的	.545	.176	.207	.540
快適な-不快な	.522	.339	.304	.802
ルールのない-ルールのある	-.238	.974	-.299	.631
私的な-公的な	-.134	.873	-.036	.589
やわらかい-かたい	.197	.792	-.136	.883
リラックスした-緊張した	.252	.675	.134	.837
自由な-不自由な	.355	.571	.064	.785
やさしい-厳しい	.229	.569	.161	.642
落ち着いた-落ち着きのない	-.042	-.159	.782	.599
穏やかな-激しい	-.005	.158	.666	.507
静かな-にぎやかな	-.465	-.304	.591	.789
因子寄与	9.451	8.637	2.045	

【結果と考察】

1 . 因子分析

まず評定に使用した SD 尺度の因子構造を調べるため、因子分析を行った。全状況に対する評定を集積し、主因子法およびプロマックス回転の結果、3 因子が抽出された（表 2 参照）。第 1 因子は、「生き生きした-生氣のない」、「陽気な-陰気な」、「明るい-暗い」などに負荷が高く、活動性とも考えられるが、「幸福な-不幸な」や「楽しい-苦しい」などにも負荷しているため、快活性と命名することができるであろう。第 2 因子は、「ルールのある-ルールのない」、「公的な-私的な」、「かたい-やわらかい」などに負荷が高く、公式性の因子と考えられる。第 3 因子は、「落ち着いた-落ち着きのない」、「穏やかな-激しい」などに負荷しており、平穏性の因子と命名することができる。

各場面の傾向を明らかにするため、3 因子のそれぞれに負荷が高かった形容詞対を選び（第 1、2 因子は各 3 項目、第 3 因子は 2 項目）、それらの評定を平均して合成得点として、場面ごとの平均値を算出した。

心理学的状況の分類に関する探索的研究（外山）

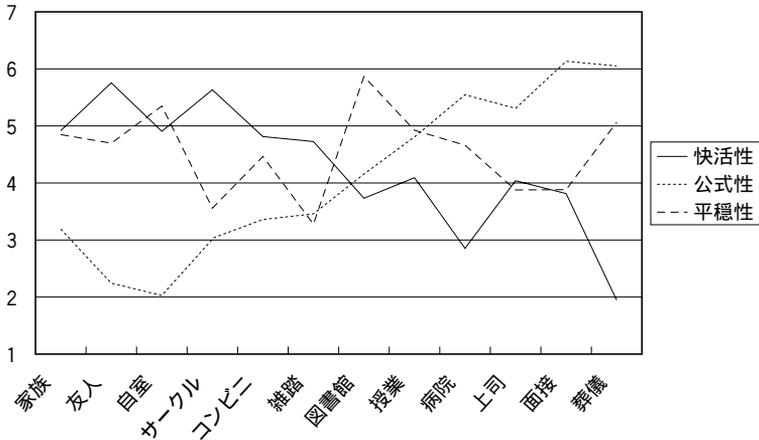


図2．各状況の次元別評価結果

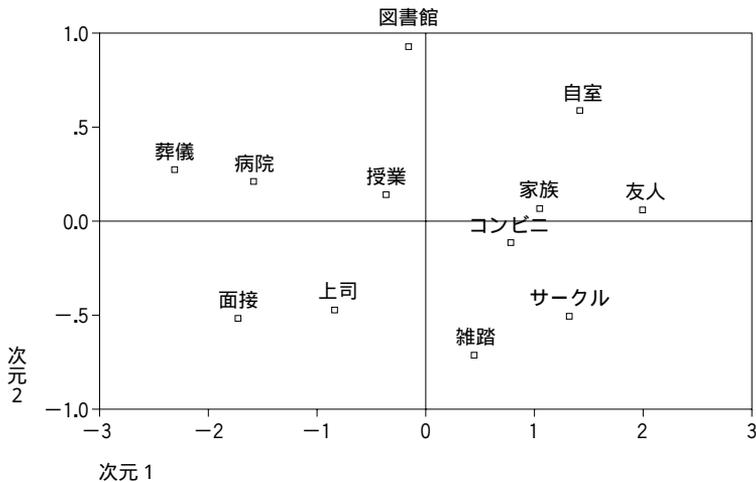


図3．多次元尺度法によって得られた各状況の布置

その結果を図2に示す。快活性評価は友人、サークル、家族などで高く、公式性は就職面接や葬儀などで高い。平穏性評価が高いのは図書館や自室である。

2. 多次元尺度構成法による各場面の布置

次に、多次元尺度構成法によって、各場面の空間的布置を検討した。各場面に対する18の形容詞対の評定をもとに各場面間の距離を計算し、それをもとにして ALSCAL による多次元尺度構成法を試みた。2次元および3次元の解を求めたが、よりわかりやすい2次元の布置を図3に示す。

第1象限には「自室で音楽」、「家族で食事」、「友人と会話」が含まれ、私的で快適な場面が分布している。第2象限には、「葬儀」と「病院」という、最も心理的な不安を伴う快適さの低い場面が含まれるほか、座標軸の近くに、「授業」と「図書館」が位置している。第3象限には、「上司からの指示」、「就職面接」という対人的な緊張を伴う場面が位置し、第4象限には、「サークルで相談」、「コンビニで買物」、「雑踏の中を歩く」など、やや騒々しく、人間関係が比較的希薄な場面が含まれる。このような配置から、次元1は快-不快にほぼ対応し、次元2は沈静-喧騒に対応するものと考えられる。

このように多次元尺度の結果では、私的で自由な状況、心理的不安や不快な感情を伴う状況、対人的な緊張感を伴う状況、規範性の高い状況、気楽だが人間関係が希薄な状況などが、それぞれまとまって布置しており、今後の状況分類に利用できる可能性が見出された。今後、より広い範囲の状況のサンプルを用いて、状況の分類を試みると同時に、帰属判断や特性推論との関連を吟味していきたい。

注

- 1) 本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（c）（2）課題番号15530403）の交付を受けて行われた。なお、調査1は日本グループ・ダイナミクス学会第51回大会（於：南山大学）で、調査2は The 28th International Congress of Psychology (Beijing) で発表された。
- 2) 「環境」と「状況」という用語に関しては、ここでは厳密な使い分けは行わない。一般には、社会的、対人的場面では「状況」が使われることがや

や多く、物理的な状態を表す場合には、「環境」が用いられることが多いが、本論ではほぼ同義のものとして扱う。

引用文献

- Fein, S. 1996 Effects of suspicion on attribution thinking and the correspondence bias. *Journal Personality and Social Psychology*, **70**, 1164-1184.
- Forgas, J. P. 1976 The perception of social episodes: Categorical and dimensional representations in two different social milieus. *Journal Personality and Social Psychology*, **34**, 199-209.
- Forgas, J. P. & VanHeck, G. L. 1992 The psychology of situations. In G. Caprara & G. L. Van Heck (Eds.), *Modern personality psychology: Critical reviews and new directions*. Harvester.
- Gilbert, D. T. & Malone, P. S. 1995 The correspondence bias. *Psychological Bulletin*, **117**, 21-38.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley.
- 堀毛一也 2002 状況 行為頻度アプローチによる特性推論過程の検討 平成11・12年度科学研究費補助金研究成果報告書
- Kelley, H. H. 1972a Attribution in social interaction. In E. E. Jones, D. E. Kanouse, H. H. Kelley, R. E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner(Eds.), *Attribution : Perceiving the causes of behavior*. Morristown, NJ; General Learning Press.
- Kelley, H. H. 1972b Causal schemata and the attribution process. In E. E. Jones, D. E. Kanouse, H. H. Kelley, R. E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner(Eds.), *Attribution : Perceiving the causes of behavior*. Morristown, NJ; General Learning Press.
- Krahé, B. 1990 *Situation cognition and coherence in personality: An individual-centered approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Krahé, B. 1992 *Personality and social psychology: Toward a synthesis*. London:Sage
- Lewin, K. 1951 *Field theory in social sciences*. New York: Harper.
- John, O. P. & Strivastava, S. 1999 The big five trait taxonomy: History, measurement, and theoretical perspectives. In L. A. Pervin, & O. P. John (Eds.), *Handbook of personality: Theory and research*. 2nd ed. New York: Guilford Press.
- Jones, E. E. 1979 The rocky road from acts to dispositions. *American Psychologist*, **34**, 107-117.
- Magnusson, D. 1971 An analysis of situational dimensions. *Perceptual and Motor Skills*, **32**, 851-867.
- Mischel, W. 1968 *Personality and assessment*. New York: Wiley.
- Mischel, W. & Shoda, Y. 1995 A cognitive-affective system theory of personality:

Reconceptualizing situations, dispositions, dynamics, and invariance in personality structure. *Psychological Review*, **102**, 246-268.

Ross, L. 1977 The intuitive psychologist and his shortcomings: Distortions in the attribution process. In L. Berkowitz(Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 10., Pp.173-220.

若林明雄 1993 パーソナリティ研究における“人間-状況論争”の動向 心理学研究, 64, 296-312 .

（心理学科 教授）